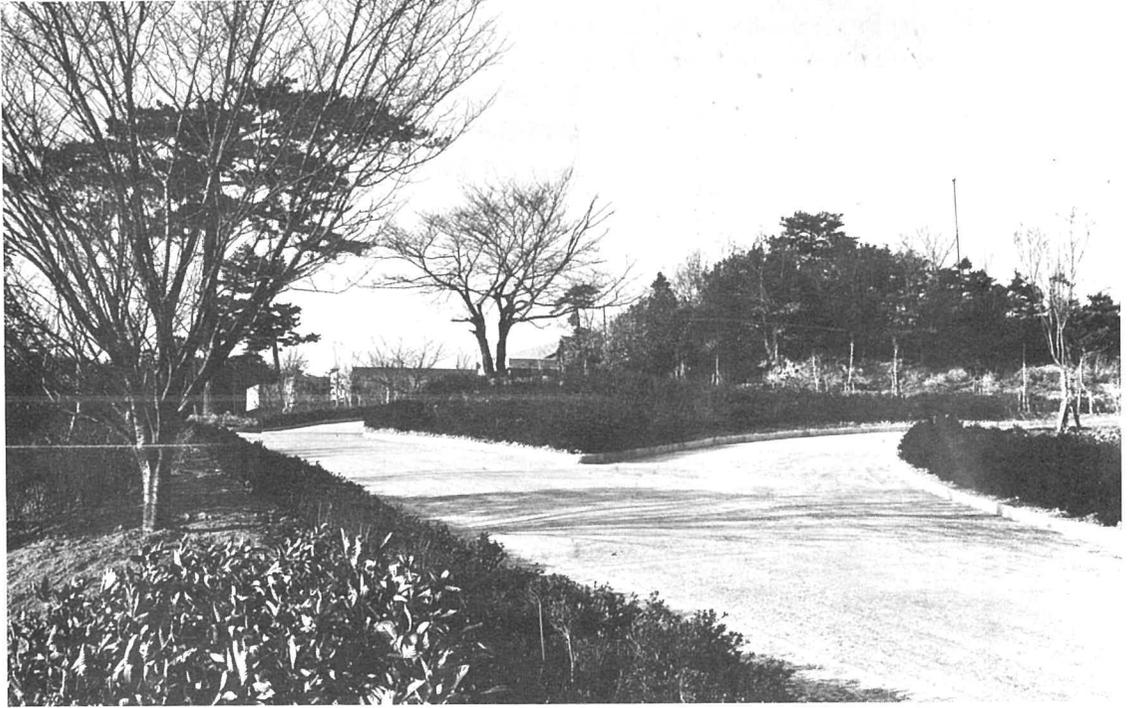


民俗博物館だより

Vol. I No. 2

1975. 3. 1



大和民俗公園々路

目 次

奈良県立民俗博物館とその環境(その1).....	1
奈良県立民俗博物館を見て(他館学芸員からのたより)...	2
奈良県立民俗博物館へ行って(小学生の作文から).....	3
冬の仕事と保存食(収蔵資料の紹介).....	4
カギヒキ(奈良県の民俗行事).....	5
体験学習講座・民俗講座.....	6
おしらせ・利用案内.....	7

その縄にひっかけて音頭をとりながら引っ張ったという。

カギヒキの後、持参したワラやシバを焼いてのドンドは、大抵の地域で行なわれていたが、室生村下笠間、砥取では「山の神さんが川から上がってこられるのを暖める」ためという。

カギヒキは滋賀県、京都府南部から三重県の伊賀盆地、東山中にかけての地域に分布するが、こういった伝承は三重県側に多い。名張市布生では、川に落ちた山の神さんを助けるためにカギを引くのだといひ、伊賀東部地方の矢持でも「神無月に杵を盗んでモチをついていたのが見つかり、その罰によって水漬けにされたので、1月7日にカギで救い出して暖めてやる」と伝えられている。山の神と田の神、水神との関連を思わせ、興味ある伝承といえる。

一方室生村古大野では、カギヒキが終わるや否や走っ

て帰り、クラの扉を開けて、入口で口をフッと吹くという。同村上笠間では口を開けて呼吸し、空気を袋（九尺袋）の中へ移して「ウチのクラヘドッサリコ、ドッサリコ」と言いつつ袋を持って家に帰る。

また、都祁村小倉の上出垣内では、男がカギヒキをしている間、家では女が倉の扉を開けているという。こういった所作は、大晦日の夕刻もしくは元旦に行なわれるフクマルヨビに際しても見受けられる。

カギヒキはフクマルヨビ、若水汲みなどと同様、招福の儀礼と見ることが出来る。年頭に当たり、フクマルヨビあるいは若水汲み、そしてカギヒキと人々は幾度ともなく繰り返して繰り返して招福の所作を演じた。それほどに福の到来を希求してやまなかったということだろうか。

(松崎憲三記)



クラタテ(山添村勝原)

体験学習講座・民俗講座

これまでに体験学習講座は3回、民俗講座は2回行なっていました。

体験学習講座は毎回100名以上の参加者を得ており大変好評です。

展示を越えた博物館のコミュニケーションの手段として、その可能性に増々期待が持てそうです。

今後は、それぞれの体験学習の内容をより充実するために、その導入としめくりを明確にする必要があると考えております。

3回目(1月26日)の「杓子づくり」では、用具やその使用上の危険もあって、前回の藁細工のように参加者

が実際に行なう事は出来ませんでした。

しかし、杓子が出来あがるまでの工程をまのあたりに見るという事もひとつの体験であり、それなりの意義があると思われまますので、今後は、このような方法も含めて考えて行きたいと思ひます。

この「杓子づくり」は、かつてはさかんな生産地であった、大塔村篠原から和泉安恭さんと、鍵谷五兵衛さんに来ていただき、実演をお願いしました。

今では、ほとんど使われなくなった、ツボジャクシ(粥などをすくう)の製作工程を見て、「今でも売っているのか」「どうして作られなくなったのか」など、参加者からさかんに質問がでました。

このような民俗博物館の活動を契機として、私たちの生活の変化に気付き、より良い明日を導くための糧となれば幸いと考えております。

やかな雰囲気をつくりだすことが出来る。サクラでは素朴な花の美しさを持つヤマザクラを、ツツジ類では花の色の変化と一部樹形の変化を求めヒラドツツジ、キリシマツツジ、レンゲツツジ、サツキツツジ、ドウダンツツジを数多く植付けた。早春のコブシ、初夏のアジサイ、盛夏のサルスベリ、中秋のキンモクセイなど四季折々に我々の目を楽しませてくれるであろう。

○おわりに

我国の野外博物館の歴史は浅い。民俗公園はその内容かららっても、今後わが国における代表的な先例となる可能性をもっている。

したがって我々は、いわば未開の領域に先鞭をつけるものであり、後学のたたき台となるべく、この構想の実現に努めたいと考えている。 (倉窪 孝記)

大和民俗公園植物開花期表

樹木名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
シロガシラ	—											
ヤマツバキ		—	—	—								
ユキヤナギ			—	—								
ジンチョウゲ			—	—								
コブシ			—	—								
ミツバツツジ			—	—								
サクラ				—								
ヤマブキ				—	—							
キリシマツツジ					—	—						
コデマリ					—	—						
シモツケ						—	—					
サツキツツジ						—	—					
アジサイ							—	—				
クチナシ							—	—				
ヤマボウシ							—	—				
サルスベリ								—	—			
ハギ									—	—		
キンモクセイ										—	—	
サザンカ											—	—

来館者の声

奈良県立民俗博物館を見て

他館学芸員からのたより

昭和49年11月10日、奈良国立博物館においては恒例の正倉院展が多数の入館者を得て幕を閉じようとしている頃、奈良県立民俗博物館が大和郡山市矢田丘陵の一角に産声をあげたことに心からお祝いの言葉を申し上げる。

奈良県立民俗博物については雑誌「博物館研究」によって多少の余備知識があったものの今回訪れる機会を得て、「百聞は一見に如かず」の感を新たにされた次第である。

○ 私の勤める博物館との共通点

矢田丘陵の一角、大和民俗公園の中にある民俗博物館を見て私共の「船の科学館」との共通点をまず感じた。

「船の科学館」は東京港の中心部「東京都臨海森林公園(計画)」の一角に建設されている。「船の科学館」とそれをとり巻く環境、立地条件等は都民のレクリエーションの場として計画されているので、交通の便は必ずしも良いとはいえないが、多くの来館者を集める要因のひとつとなり、一応成功していると考えている。

奈良県立民俗博物館の場合も同じような発想のもとに計画されているようだ。まず博物館を公園の中心施設としてその背景に県内の古民家を、地域ブロック別に配して野外展示をし、全体を大和民俗公園と称して総合的な環境の中で、訪れる人々により楽しいレクリエーションの場を提供する計画である事が概要書に掲げられている。実に将来が楽しみである。

○ 展示について

まず導入部として奈良県の地形模型を掲げ次へのアプローチとしている。私の奈良県についての印象というのは、奈良盆地を中心に開かれた古代日本文化のイメージが強く、奈良盆地のみが奈良県の全てであるかのごとき

感じさえ持っていた。

しかし、この地形模型を見ると奈良盆地の面積というのは僅かで、大部分は丘陵部や山間部である事がよくわかる。そして、次に続く展示の内容もそれぞれの地形にあった生業を取り上げ「大和の民俗展」としているのは開館当初の展示として妥当な内容であろう。

今回の展示「大和の民俗展」を見て一番印象に残ったのは、展示資料を説明するのに文字を少なくし、それに代るものとして展示資料の用途や使用方法などを示す写真パネルやイラストパネルを主体にして、観覧者の注意を「読む努力」から「視る努力」に変えている点が、従来

の博物館の展示解説と大きく異なっている。幼児から老人まで不特定多数の人々を対象とするのが博物館展示のたてまえであるが、この展示法は今後の博物館の展示に影響を及ぼすものと思われる。

また展示室に隣接して郷土学習室を設け、実物資料に直接触れたり、体験学習講座などで、来館者に古人の知恵を理解させて古くて役にたたなくなったものの中から博物館資料としてその価値をよみがえらせようという職員の方々の意気込みが感じられた。

博物館でのこのような体験学習は、近年建設の館でいろいろ実験されているが、展示のようにいつでも見られるというわけにはいかず、種々問題はあがあるが、今後の可能性については大いに期待できると思う。

○ 展示室について

展示室は、1,207㎡の広間一室であるが、その中をユニットパネルや展示ケースで区切って、全て可動としている。種々の展示変えなどに当たっても容易に動線変更が可能であり、常に固定化された空間利用からくる観覧者の心的飽和を防ぐよう心がけているようだ。

また展示室を広い一室として一階に設け、車イス等を



利用する体の不自由な人々への配慮も忘れていない点は大いに感心させられた。

○ 収蔵部門の施設について

最後に博物館の施設の心臓部ともいうべき収蔵庫関係の施設を見学する事が出来た。

収蔵部門は地下にあり、収蔵庫 568㎡、特別収蔵庫194㎡、他に消毒室、荷解場、未整理室、洗場等が設けられ計 1,114㎡の広さを用意している事には驚かされた。

一般に博物館の収蔵部門のスペースは展示面積と同じかそれ以上といわれているが、これらのスペースは一般利用者の目に融れる事がなく、おごなりにされがちである。

また利用者の側も展示品のみが博物館の収蔵資料の全てのように思いがちであるが、博物館の機能として、平素展示される「もの」以外の保存、整理も非常に重要な仕事であることはいうまでもない。

これらの点についても怠りなく十分なスペースを準備された民俗博物館建設の関係者に対し心から敬意を表したい。

○ ま と め

この博物館を見て、地方博物館のあるべき姿と可能性について強く感じる場所があった。

展示室で観覧者の感想をいくつか耳にしたが、いずれも自分達の郷土に対する親しみと喜びの声であったと思う。

私はこの館を訪れて地域社会に根を張る地方博物館のあるべき姿と可能性を感じ、博物館関係者としてのものもしく思った次第である。

奈良県立民俗博物館の今後の活動と、増々のご発展を期待してやまない。

日本海事科学振興財団 船の科学館

学芸員 石川博幸



稲作コーナー「車ふみ」

民俗博物館へ行って

小学生の作文から

東大阪市立長瀬小学校 四年二組 村上優佳

社会見学で、奈良の民俗博物館へ行ってきました。そこには、むかしの人が、いろいろふうして作り出した用具などが展示してありました。科学の進んでなかった時代なので、木とか、竹で作ったものが多いでした。家へ帰ると、おばあちゃんが遊びに来ていたので、話をしてやると、むかしのことをいろいろ話してくれました。例えば、おかゆをすくうしゃもじの話をする、「まだいなかの家においてあるよ」といっていました。わたしの一番目にとまったのは、茶つみかごとチャンぶくろでした。とてもさむい日でした。

コメント

子供達の「小さな目」は、我々が気付かぬ部分で、貴重な発見をするものである。今後この小さな意見も尊重し、展示効果を知るバロメーターのひとつとして充分検討し、教育普及活動の資料として行きたい。

東大阪市立長瀬小学校 四年三組 上田直子

12月6日に奈良県立民俗博物館へ行きました。一番に見たのは山の仕事です。とてもかわったコピキノコを見ました。キノコとついたのは、上の方にキノコみたいなものがあつたからだと思います。人形でもほんとの人間みたいでとてもよくわかりやすく、おにいさんたちがおしえてくれたからとても勉強になりました。と石は今とぜんぜんちがいます。その次に、お米のだっこ機を見ました。うまいこと米の皮とほごりは、左の横から出て重い方は右下に出て二番めに重い物は左下に出ようになっています。あんなにうまくいくのかなかと思いました。いろいろ見たあとおべんとうです。おべんとうが終わってから、また見ました。こんどは大和のお茶や日々のくらしを見ました。そのあとオートスライドを見ました。社会の本にはのっていますが、博物館の方がおもしろいよくわかりやすいから、またいきたいと思っています。

博物館を出るとき、博物館の人に「ありがとうございました」と言うつもりでしたが、おられなかったので、言えませんでした。でもほんとうに「ありがとうございました」、

(原文のまま)

— 冬の仕事と保存食 — 収蔵資料の紹介

(2)

1. 冬の仕事

平坦ではウラケの麦作りが冬の主な仕事であったが、東山中の山添村三ヶ谷あたりでは、男が炭焼きに割木作り、女はオウミ（麻績）とおよそ決まっていた。オウミはもちろん一人でもしたが、三、四人寄って噂話に花を咲かせつつ手を動かすのが、女達の何よりの楽しみであった。カセヤさんが持って来た麻の皮を白水に漬けてそれを績む。麻の皮を口にくわえて指先で繊維を細かく裂き、それをオモケ（麻笥）に入れてゆく。出来上がると仲間同士出来高を見比べ、自慢し合うこともあったという。オウミは昼間の仕事であった。夜はコトボシカランプの薄暗い光で、糸車でよりをかけて管に巻きつける。次にはそれを手でカセにする。1カセ60すじで10個し、600すじで一まとめの仕事となる。出来上がったものはカセヤさんに渡した。カセヤさんは同村北野に2軒ほどあり、都祁村深川や菅生などにもあった。

炭焼きはヨセガマといい、何人が集まって山を買ひ共同で焼いていた。しかし、今はもう炭焼きに従事する人はほとんどいない。火鉢の炭は自分で焼いたものをくべないと気が済まぬという老人が、自給用にほんのわずかの量を焼いているにすぎない。

タテアミ（炭俵）を作るのもやはり男達の仕事で、12月のうちに刈り取っておいた茅を用いてコワシマタ（俵編機）で編む。コワシマタは長さ40、50センチのネンネン（合歡）の木の股を二つ割りにしてホゾをつけ、1メートルほどの横木を渡したものである。横木の材質は何でもかまわなかったが、断面が逆三角形に近い形のものだと編むのに都合が良いという。その横木には適当な間隔で刻みが入っており、3メートルほどの細縄を両端からコロに巻きつけ、それを4組用意して刻みにかけ渡す。横木に茅を横たえて2組ずつコロを交差させ、また茅を置いてコロを交差させるという具合に順次繰り返して編み上げていく。米俵を作るのも同じ要領であった。

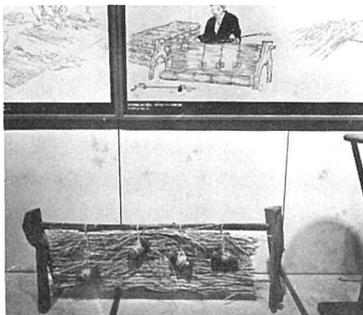
正月には神の依代としてカドマツを立てるのが普通であるが、山添村大塩には、このコワシマタにコロを吊してカドの中央に置く家がある。カドマツ同様山から土を一荷持ち帰り傍に盛り上げておいた。同じような例は兵

庫県淡路島にも見られる。同島仁井では、カドマツを立て、庭の隅にコバシサン（俵編機）を祀るが、ここではコバシサンは使い歩き之神で、他の神や田に捧げる注連縄などを供えると、この神が祀るべき所へ持ち回ってくれるといっている。また、同島の南部地域では、コバシサンはジマツリをする場所であって、ここにジノカミが正月に祀られるのだという。残念ながら山添村では、そのような伝承は採集されていない。

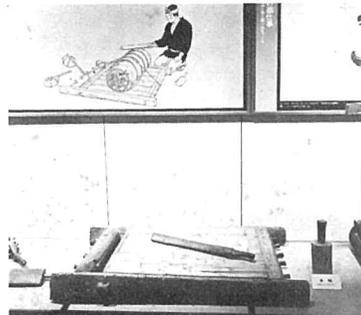
俵締めも冬の仕事である。寒の1、2月になると俵の縄がゆるんでくる。寒の頃は米が一番縮まるので、この時俵締めをしておく。そうすると夏になっても米に虫がつかないという。米俵を俵締機に乗せて縄をかける。縄の一方を台の片側の突起に結び、片方は互い違いに3ヶ所にホゾをあけた丸太に結びつける。この丸太は回転式のもので、重石を棒に結びつけてホゾにさすと動き、縄がからまって締まる仕組みになっている。一人が叩き棒で俵を叩き、もう一人が重石を他のホゾにさしていく。石が重すぎると縄が切れるので注意を要した。適当に縄が締まった頃を見計らって米俵に巻きある縄を結び直す。それが済むと同じように次の巻縄のすぐそばの位置に縄を渡して締めつけ、また巻縄を結び直す。俵締機にはこの他、木製のハンデイなものと同締め付きの鉄製のものがある。前者では、縄の一端を俵締機に結びつけ、俵にその縄を回してもう一端を俵締機の歯車の芯に巻きつける。そうしてツチンコで俵を叩きながら手動式に歯車をからませていくと縄が締まるので、俵の巻き縄を結び直すことが出来る。後者はその改良型と思しきもので、歯車にからませる縄を鉄輪に代えて、それをやはり鉄製の歯車状のものに固定してある。これにはツチンコは不要である。以上三様の俵締機は、それぞれ順に俵締機の発展のプロセスを象徴しているものと思われる。

2. 保存食

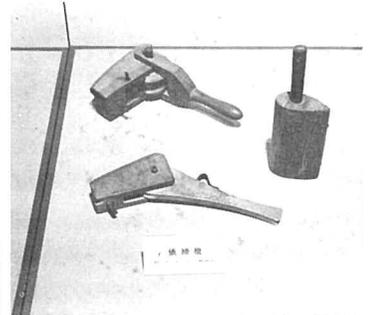
大和は他の地域のように、何ヶ月もの間白い闇に包まれて、冬越しの食事に事欠くといった厳しい事情は無かった。それでも女達は、冬用の食物そして保存食の準備にと、あれこれと心砕かなければならなかった。



俵編機



俵締機(1)



俵締機(2)

漬物と味噌はかつての私達の食生活には欠かせぬものであった。漬物は副食としていつも食膳に供せられ、味噌は味噌汁や雑炊、和え物に使い、また、茶粥に入れてかきまぜたり、オヨマ(麦だけ炊いたもの)につけて食べたり、砂糖と混ぜ合わせて副食として食べるなど大変利用度の高いものであった。そして、この漬物と味噌は農閑期を利用して造っておかなければならない食物の一つであった。

味噌は米、大豆、塩などを用いて、大抵自分の家で造った。先ず米をセイロで蒸し、その米をコウジのハナ(菌)と混ぜながらコウジヅタに入れて、コタツの上に置き暖める。3、4日おくと黄色くカビがついてくる。一方、大豆は鍋でゆっくりと煮ておき、カラウスでつぶす。つぶした大豆と黄色くカビのはえた米と(家によっては大豆を炊いた汁も加える)、各家の好みの量の塩を混ぜ合わせて味噌桶に仕込んだ。

山添村あたりでは、このような味噌のほかに、ミソダマでも造った。ミソダマとは、炊いた大豆をカラウスでつぶして、それを自分の手に握れる分量ずつ丸めたものである。丸めたものは藁2本で十字型に結び、クド(カマド)の近くに吊しておいた。このミソダマを作る頃はちょうど奈良市の春日さんのオンマツリにあたるので、オンマツリミソとも言った。こうして吊しておいたミソダ

マを、三月頃再びカラウスでついて粗いトウシを使って粉にする。その粉に塩と水を混ぜて桶に仕込んでいく。こうして仕込まれた桶は、家の隅にある味噌部屋に置かれる。仕込んでから70、80日たつと食べることが出来る。

漬物についていうと、この時期には大根を漬ける、いわゆるコンコ(コウコ)を造った。今は色粉を入れて黄色くするが、昔はヌカと塩だけで漬けた白いコンコであった。長く保存しようとしたため、塩味がものすごく強かった。それでも茶粥といっしょに食べると、さほど辛いとは感じなかった。大根はこの他干物にして保存をした。皮をむいてワラにくくりつけて軒先に吊すツリボシや、切ったり割ったりして吊すキリボシやワリボシなどにした。こうした干物はいつでもジャガイモやサトイモといっしょに煮ることができ、良い副食物となった。

この漬物造りや干物造りも全て女達の仕事で、農閑期とはいえ忙がしさに追われ通しであった。保存食としてはこの他にサトイモの茎を切って干したワリナがあり、また十津川では、サツマイモのカンピョウ(カンコロ)などもこの時期に造っていた。(松崎・浦西記)

註

①豊原村史 昭和35年

②西谷勝也著「季節の神々」慶友社 昭和45年

カギヒキ

— 奈良県の民俗行事 —

(2)

1月7日の山の神まつりには、東山中の処々方々でカギヒキが繰り広げられる。山添村勝原では、6日のうちにドウゲと呼ばれる月当番が二人、カギとフクダワラを用意する。カギは2、3メートルのカシカウツギの枝を取り、元の方の小枝を切り残して股状のものをこしらえる。それをお宮さん(八柱神社)の傍の小さな森にある馬酔木の枝に掛けておく。また、中に神殿の石を入れたフクダワラ(ワラヅト)を一つこしらえ、やはり馬酔木の枝に結びつけておく。

翌7日の末明、各家毎に男は全てうち揃って出かける。山の神の森に着くと、先ずクラタテをする。この森は滑らかなスロープをなしており、クラタテは早く来た家から順に上からしていく。地面に白紙を置いて、幣をつけたカヤかアマコ竹を四隅に立て、中央にはカキ、クリ、トコロを突きさしたカヤまたはアマコ竹を立ててユズリハとモチを供える(クラタテは11日のノウニンハジメに際しても行なわれる)。それが済むと「東の国の糸綿、西の国の銭金、アカウシにつけてうちの倉へどっさりこ」と唱えながらカギヒキをする。そしてドウゲが準備したドンドで山の神に供えたモチを焼いて持ち帰り、七草粥に入れて食べるのである。

かつては、山仕事に携わる人々がドンドの炭火をフク

ダワラに入れて持ち帰り、仕事小屋に吊しておいたという。今は15日のドンドの時、この時は主に女が出かけることになっているが、やはりフクダワラに炭火を入れて持って帰り、それをミソ部屋に吊しておく。こうするとミソが良く出来るといった。同村三ヶ谷では、ドンドの時に枝付きの竹を持って行き、それを焦がしてミソ部屋に下げる。またここでは、フクダワラを男の数と山の神に供えるもの一つをこしらえ、後者をカギに結びつけてカギヒキをした。残りは持ち帰って一年間エビスさんに供えておくという。勝原には下田にも山の神の祀場があって、カギヒキも行なわれていたらしいが、いつの頃からか宮の傍の現在の場所一ヶ所に合祀されたという。勝原でも、かつてはカギを家毎に用意していたのだろうが、その頃から簡略化されたのではないかと思う。フクダワラについての混同も、それに伴う現象ではなだろうか。

勝原や三ヶ谷のカギヒキは、神木と思しきものにカギをひっかけて行なわれるが、山添村下津や月ヶ瀬村尾山、同村石打などではカンジョウナワにカギをかけてカギヒキをする。月ヶ瀬村尾山では、お宮さんにある山の神の傍の木に、直径30センチ、長さ18メートルほどのカンジョウナワを掛け、縄に大きなホーデン(ワラヅト)をつける。各家から男達がカシなどで作ったカギを持ち寄り

その縄にひっかけて音頭をとりながら引っ張ったという。

カギヒキの後、持参したワラやシバを焼いてのドンドンは、大抵の地域で行なわれていたが、室生村下笠間、砥取では「山の神さんが川から上がってこられるのを暖める」ためという。

カギヒキは滋賀県、京都府南部から三重県の伊賀盆地、東山中にかけての地域に分布するが、こういった伝承は三重県側に多い。名張市布生では、川に落ちた山の神さんを助けるためにカギを引くのだといい、伊賀東部地方の矢持でも「神無月に杵を盗んでモチをついていたのが見つかり、その罰によって水漬けにされたので、1月7日にカギで救い出して暖めてやる」と伝えられている。山の神と田の神、水神との関連を思わせ、興味ある伝承といえる。

一方室生村古大野では、カギヒキが終わるや否や走っ

て帰り、クラの扉を開けて、入口で口をフッと吹くという。同村上笠間では口を開けて呼吸し、空気を袋（九尺袋）の中へ移して「ウチのクラヘドッサリコ、ドッサリコ」と言いつつ袋を持って家に帰る。

また、都祁村小倉の上出垣内では、男がカギヒキをしている間、家では女が倉の扉を開けているという。こういった所作は、大晦日の夕刻もしくは元旦に行なわれるフクマルヨビに際しても見受けられる。

カギヒキはフクマルヨビ、若水汲みなどと同様、招福の儀礼と見ることが出来る。年頭に当たり、フクマルヨビあるいは若水汲み、そしてカギヒキと人々は幾度ともなく繰り返し繰り返し招福の所作を演じた。それほどに福の到来を希求してやまなかったということだろうか。

（松崎憲三記）



クラタテ(山添村勝原)

体験学習講座・民俗講座

これまでに体験学習講座は3回、民俗講座は2回行ないました。

体験学習講座は毎回100名以上の参加者を得ており大変好評です。

展示を越えた博物館のコミュニケーションの手段として、その可能性に増々期待が持てそうです。

今後は、それぞれの体験学習の内容をより充実するために、その導入としめくりを明確にする必要があると考えております。

3回目(1月26日)の「杓子づくり」では、用具やその使用上の危険もあって、前回の藁細工のように参加者

が実際に行なう事は出来ませんでした。

しかし、杓子が出来あがるまでの工程をまのあたりに見るという事もひとつの体験であり、それなりの意義があると思われまますので、今後は、このような方法も含めて考えて行きたいと思います。

この「杓子づくり」は、かつてはさかんな生産地であった、大塔村篠原から和泉安恭さんと、鎌谷五兵衛さんに来ていただき、実演をお願いしました。

今では、ほとんど使われなくなった、ツボジャクシ(粥などをすくう)の製作工程を見て、「今でも売っているのか」「どうして作られなくなったのか」など、参加者からさかんに質問ができました。

このような民俗博物館の活動を契機として、私たちの生活の変化に気付き、より良い明日を導くための糧となれば幸いと考えております。

第2回目の民俗講座は「吉野の木地師」という題で、近畿民俗学会の岸田定雄氏に講演をお願いしました。

かつては、吉野山地の谷々に数多くあった木地師という木碗作りの技術集団と、それに関連する吉野塗についてお話しされました。



民俗講座「吉野の木地師」

今でもただ一人木地師の技術を伝えている、辻本順三氏（吉野町宮滝）と、吉野塗の職人である上田梅吉氏（下市町下市）の仕事の工程を、スライド映画で見ながらお話しを聞き、いっそう容易に理解することができました。



体験学習講座「しゃくしつくり」

**** おしらせ ****

民俗博物館の行事予定

- 2月23日 体験学習〈ぞうりつくり〉
- 3月2日 民俗講座〈家の神について〉
- 3月9日 体験学習講座〈麻糸つくり〉
- 3月23日 体験学習講座〈むしろ織り〉

※体験学習講座は、午前11時と午後2時の2回、それぞれ1時間あまり行います。

民俗講座は2階の講義室で行います。

● 利用案内

観覧時間 午前9時～午後5時まで

但し入館は午後4時30分まで

休館日 毎週月曜日(その日が祝祭日の場合は翌日)と年末年始

観覧料 大人100円・学生70円・小人50円

20名以上団体割引

交通機関 近鉄郡山駅より奈良交通バスの矢田山町、泉原町、矢田寺前ゆきにて「矢田東山」下車。国鉄関西本線郡山駅下車、バスセンターまで徒歩10分、奈良交通バスにて「矢田東山」下車。

※ 県内の小学校、中学校、高等学校及びこれらに準ずる学校(盲学校、ろう学校、養護学校、職業訓練校及び国立高等専門学校等)の児童及び生徒が、教職員の引率のもとに観覧する場合、観覧料は免除されます。

編集後記

大和民俗公園の整備も徐々に進行中であり民俗博物館の活動もまだまだこれからです。県民の皆様にも親しまれる博物館にするため職員一同増々はりきっております。

春になるとすでに一部整備された民俗公園にサクラやツツジが花開きます。

春の一日、のどかな環境にめぐまれた民俗博物館へお出かけになつてはいかがでしょうか。

